

1999年12月

とおるとりえこのハーバード便り

第三号

発行人：野村 亨、理英子

住所：# 2, 472 Broadway, Cambridge,
MA. 02138, U.S.A.

電話：1-617-864-1091

私こと理英子は、10月25日から11月19日まで語学スクールに通い、第1回目のセッション（約1カ月単位の学期）が終わったところです。そこで、この一カ月の生活について以下にご報告します。

《語学スクール入学》

ブータンに出張する亨ちゃんを空港まで見送った私は、その足で語学スクールに行きプレイメントテストを受けた。翌日のクラス分けでは、グラマーだけレベル5で、会話や作文はレベル4のクラスになった。レベルは10段階に分かれているので、中の下といったところ。なにしろ、約20年振りに英語を勉強しようというのだから致し方ない。10代後半や20代前半の若者と席を並べて勉強するつもりでいたが、各レベルが更に年齢分けされていたので、私が最高齢という訳でもなかった。アダルトクラスの男性は、企業から派遣されている人が多い。企業がお金を出して社員の再教育に力を入れる時代なのだろう。若年層はアジアの学生（日本・韓国）が多いが、私のクラスは中南米の人が大多数だった。

《授業形態と内容》

授業のオリエンテーションでは、評価基準が項目ごとに%で明示される。どこかで見たような表だ。授業はロールプレイを取り入れ、いかに生徒を動かすかに力点がおかれている。いわゆる考えさせる授業というわけだ。本当をいうと授業を受けながら私はだんだん腹がたってきた。教員だった時に一生懸命に研修した内容は、アメリカの教育の受け売りだったことを確信したからだ。舞台裏を覗いてしまった気分だ。あまつさえ、作文の授業での意見文の構成、立論、根拠のあげ方について、または評論文の読解の仕方などは言語こそ違え、国語の授業で扱ってきた内容そのままではないか。結局、現代の日本語そのものがアメリカ的発想に沿うように既に変身してしまっているのだ。理屈では分かっていたものの、国際化に対応するとか、グローバルスタンダードとかいう曖昧な言葉の意味するところは、日本人にアメリカ的価値観を身につけさせようということだったのを実感し、ショックを受けた。これも一種のカルチャーショックなのだろう。

《授業評価等》

今、時代の流れは教育に対して厳しい。授業評価、学校評価が一般に行われるようになるのだろうか。豈図らんや、この語学学校でも生徒による教師評価が行われていた。セッションの終わりに、受講生が各授業ごとに細部に渡って10段階の評価を行う。失礼だとは思ったが、私はこの評価が教師の給料に反映するのかを聞いてみた。単なるアンケートと査定では大きく意味合いが隔たるのだ。何人かに聞いてみたが答えは同じだった。どうやら、その結果は翌々月位の給料に影響を及ぼすらしい。また、セッションの初期段階では自分の希望でクラスを変えることが可能だが、(レベル換えだけではなく、教員を選ぶことも可能なのだが、)その初日の受付を校長自身がおこなって情報収集をしているらしき様子には驚いた。もちろん私立学校だからこそ可能なのだろう。



ハーバード大学サイエンスセンター喫茶室にて同大学のウィルキンソン教授と歓談する。教授の専門は近代ヨーロッパ史、亨はこの喫茶室でよくパンとサラダの昼食を摂った。2000年1月19日

た、セッションの初期段階では自分の希望でクラスを変えることが可能だが、(レベル換えだけではなく、教員を選ぶことも可能なのだが、)その初日の受付を校長自身がおこなって情報収集をしているらしき様子には驚いた。もちろん私立学校だからこそ可能なのだろう。

実は、夫と二人して風邪をひいて病院にいった時、まずはカタログを見て医師を選ばなければならなかった。結局、英語で細かなニュアンスを伝えられない場面を想定して、中国語のできる華人の医師を選んだが、誰でもいいという発想はここでは通用しないのだ。いわゆる先生と呼ばれる職業にも浸透している競争社会の厳しさにため息が出た。

実は、夫と二人して風邪をひいて病院にいった時、まずはカタログを見て医師を選ばなければならなかった。結局、英語で細かなニュアンスを伝えられない場面を想定して、中国語のできる華人の医師を選んだが、誰でもいいという発想はここでは通用しないのだ。いわゆる先生と呼ばれる職業にも浸透している競争社会の厳しさにため息が出た。

《クラスメイト》

カザフスタン、コスタリカ、ベラルーシ等、様々な国の学生がいる。最初、ブラジルのクラスメイトの英語は私にはスペイン語にしか聞こえなくて困った。やはり国は違えども同じアジア人同士の英語は聞き取り易い。特に韓国と日本の共通点は多い。鈴木孝夫氏が日本製英語を推奨していたが、アジア内だけだったら強い日本語なまりの英語でも通用しそうだった。



理英子の英語学校の同級生を自宅に呼んでホームパーティーをした。左からアサン(カザフスタン)、オルガ(ベラルーシ)、理英子。1999年12月15日

ところで、ブラジルのクラスメイト、マリアが、

「あなたは、日本が好きか。」と聞いてきた。妙な質問だ。「もちろん。」と答える私に周囲から喝采の声が上がった。「私たちが英語を学ぶ

のは、ただ単に英語が世界の共通語だからに過ぎない。」と彼女は叫ぶ。

セッションの終わりに、彼女たちはブラジリアン・パワーを称賛していた。英語を学ぶということに屈折した心理の影を感じさせられた瞬間だった。

《ホームステイ》

夫が出張中の約3週間余り、アパートはそのままにして私は郊外にホームステイをした。

アメリカ人家庭を経験できるめったにない機会だからだ。私のホストファミリー、ジョンソンさんは、看護婦として働く51歳の女性で、息子さん2人は既に自立して家を出ている。ボーイフレンドのフランクが頻繁に訪れるが、基本的には一人暮らしだ。フランクは大工さんなので、仕事がない時には彼女の家にいて、掃除・洗濯・料理となんでも器用にこなしてくれる。最初は奇異な感じがしたがすぐに慣れてしまった。

学校からの紹介とはいえ、見ず知らずの外国人に家を開放できるのはすごい。その恩恵に預かりながら自分には出来ないことだとひそかに思う。家の戸締まりも、余り厳重にはしない。郊外の住宅地で安全だからだろうか。間違っても他人の敷地に入ったら撃ち殺されるかもしれない国だと思っていたが、それとは大分印象が違った。「あなたは、もう家族だから。」と、ホームステイが終わった後も、家の鍵を返却する必要はないと言ってくれた。私は、これははじめだからと言って、受け取ってもらったが、家族という括りが日本人とは違うのかも知れない。

《食事》

夫と私がアパートで美味しいと食べていたチーズもシチューもサラダも、実は贅沢品だったらしい。ジョンソンさんと一緒に買い物に行ったスーパーで、私が気楽に選ぶとしたチーズやサラダは高すぎるからと困った顔をされてしまった。よく見たらそれら



亨の満48歳の誕生日をハーバードスクエア近くのハーヴェストという洒落たレストランで祝った。2000年2月20日

のチーズはヨーロッパからの輸入品だったし、サラダも晴の日用だ。アメリカでもどこでも、それなりにお金を出せば美味しいものが食べられると言うことか。



結氷するチャールズ河畔にて、対岸にボストンのダウンタウンが見えている。2000年1月19日

ここでの国民的課題は、何といたってもダイエットだろう。ジョンソンさんは職業柄、カロリーの摂取にかなり気を遣っていたし、フランクはダイエット中でスズメの涙ぐらいしか食べない。ここ数カ月で10数キロ痩せたという。私がアメリカの家庭料理を習いたいと言ったら、日本食という健康食品を食べられるのに、なぜ不健康なアメリカ

の料理がいいのかと怪訝な顔をされてしまった。どうやら日本食信仰とでもいうべきものがはびこっているらしい。ジョンソンさんの友人のリン

ダは、「日本女性は更年期障害がない。」と彼女の主治医から言われたという。日本女性は豆腐を食べるから更年期障害にはならないんだそうだ。毎日豆腐を食べていると言うから

冷や奴かと思って食べ方を聞いて見たら、ミキサーにいれてジュースと混ぜて飲むと言う。あまり想像したくない味だ。

以上、思いつくままに1カ月の生活を綴ってみました。11月23日から第2回目のセッションが始まっています。とりとめのない話で恐縮ですが、またこの続きをご報告したいと思います。皆様、よい新年をお迎えください。 (文責 理英子)



左：カナダ旅行。川霧の立つセントローレンス河畔にて、対岸はモントリオール。この日の気温は零下25度。
右：ニューイングランドにも遅い春がやってきた。ハーバード大学教員クラブにて、2000年4月6日